

沼津市若山牧水記念館

第39号 2007.9.20

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

東北への旅



牧水の東北地方へ

の旅は、大正五年三月十四日から宮城、岩手、青森、秋田、福島と辿った約一カ月半の旅、翌六年八月、秋田から酒田、新潟を巡り、長野へと回った旅、そして、大正十五年九月に妻喜志子を伴ったの北海道への旅の往き帰りに福島、盛岡、青森と辿った揮毫旅行の三回である。

大正五年の旅は、『海より山より』に収められている「塩釜行」「津軽野」「松島村」「板留温泉」によって、その行程をたどることができる。三月十五日に塩釜、十七日に盛岡の菊池知勇のところへ立ち寄った後、青森に入ったようだ。二十三日に青森の藤野草明方から高塩背山へ送った葉書があり、二十九日に「今日は池野君と都庵といふ蕎麦屋の二階で、最も静かに飲んでゐる」と和田山蘭へ手紙を書いており、三月二十三日から二十九日まで青森に居たと推測される。

歌集『朝の歌』の中に、「残雪行」として次のような歌がある。

大吹雪の野辺地駅に草明君出で迎ふ

われ待つと荒野野辺地の停車場の吹雪のかけに立ちし友

はも

青森駅着、旧知未見の人々出で迎ふ

やと握るその手この手のいづれみな大きからぬなき青森

人よ

明けぬとて酒、暮れぬとてまた

酒戦たれか負けむとみちのくの大男どもい群れどよもす

たくたくと大酒樽のひもすがら断えず吹雪きて夜となり

しかな

今年六月二十六日、東京在住の斉藤健治氏が記念館を訪れ、沼津牧水会に二枚の写真を寄贈して下さった。

掲載の写真はその一枚で、前列中央が牧水、右に松井白花、

池野漁村、左に高田螢汀、木村横斜、後列は左から斉藤久次郎、藤野草明。白花、漁村、螢汀、横斜の四人は創作社社友

斉藤久次郎は当時銀行員で文学に堪能、そんな縁で同席したらしい。藤野草明は、野辺地駅へ牧水を出迎えた人で、青森

在住の画家。牧水はこの人の家に居続けたらしい。この写真

も藤野草明のアトリエで撮ったもの。

斉藤健治氏は、斉藤久次郎のご子息で、藤野草明は母方の

伯父にあたるとのことである。斉藤久次郎は後に弘前に移り、

青森銀行から弘前商事を興し、同時に弘前小唄、板留温泉音

頭などの作詞をするなど文学運動に長く関わったそうだ。

もう一枚の写真には、牧水を囲んで二十七名が写っており、

「明けぬとて酒、暮れぬとてまた」の折りの写真と思われる。

大正期の青年たちの文学家たらんとする気概を表すような

腕組みをした姿勢が興味深い。

(須永秀生)

天才牧水の青春以後 水原紫苑

青春時代に天才的な輝きを見せた詩歌人のその後の人生はいかなるものであろうか？

このテーマに興味を持つ人は少なくないだろう。

殊に私は、亡き師春日井建が、少年時代からのきらめきを収めた第一歌集『未青年』で短歌史に、「若き定家」として名を刻んだうたびとだったことから、こうした早熟の天才たちに強く惹かれてきた。

若山牧水が早熟型の天才であることは疑いないだろう。

第一歌集『海の声』は明治四十一年に刊行されている。牧水は明治十八年生れだから二十三



第1歌集『海の声』

歳ということになる。青春歌集にほかならない。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ 『海の声』

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひながら死せ果てよいま

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられなばいかにしたまふ

くちづけは永かりしかなあめつちにかへり来てまた黒髪を見る

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつづあぐがれて行く

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

誰もが知る名歌中の名歌である。特に、「白鳥は哀しからずや」と「幾山河」の二首は、短歌史と言うより、記紀万葉以来の歌の歴史の中でも傑作として残るものだろう。

本当に、うたびとは、このような名歌を、一生に一首でも詠むことができたなら、それだけで死んでもいいのである。

それを二首いやもつとたくさん生み出してしまった若者は、これからどうすればよいのか。

牧水とて、悩まなかつたはずはないと思う。現に、私は亡き師春日井建から、『未青年』刊行の後の悩みではないが、建を「若き定家」と呼んだ三島由紀夫に、「今すぐ死ぬことが君にとつて最高だ」という意味のことを言われたと聞いている。

すばらしいものを青春時代に創り上げてしまったら、その時点で死ぬのが最高の生き方だというのは、いかにも三島の美学にふさわしい。だからこれはこの上ない賛辞であるはずだ。



春日井建（「未青年」発表の頃）



『未青年』50首が掲載された『短歌』（昭和33年8月号）

しかし、春日井建はその時死ななかつた。そして、もちろん、牧水もその後を生きた。うたびと、あるいは詩人一般といつてもいいかも知れないが、そういった人々にとつて生きることはどんな意味をもつのだろう。

生きることが日常に埋没することであるならば、時を重ねることがうたびとを傷つけるものとなり得るだろう。

ここで言う日常に埋没するとは、生活をおとしめる意味ではない。

地道な生活の中にも、日常に埋没しない詩精神は屹立し得る。

だが、うたびと牧水が生きたのは、やはり平凡な生活ではなかつた。

最初に愛した女性が、結婚できない状況にあつたことは、世に珍しい話ではないとはいへ、牧水を深く傷つけたにちがいない。

恋の高揚と陶醉が過ぎ去つた後、牧水は、その名も『別離』という第三歌集に、やはりよく知られた次の一首を収めている。

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしき
はみ君におくらむ 『別離』上巻

以前から私はこの歌がよくわからなかつた。もちろん言葉の意味はわかる。しかし、「さびしききはみ君におくらむ」には、恋歌としてどこか普通でないものがある。

今回この小文を書くために読んでみて、ここには男のひそやかな、愛ゆえの呪詛の感情がこ

められているのではないかと思つた。

呪詛すなわち呪いと言つては強すぎるかも知れないが、「さびしききはみ」は牧水自身の心の「さびしき」ではあるまいか。そう考えると「秋くさの」までが序詞のようにも読めて来る。もちろん、「吾木香すすきかるかや」のイメージは鮮明なので、これはいわゆる有心の序である。

男が、別れてゆこうとする愛する女に、自身の「さびしき」の「きはみ」を「秋くさ」の花束として贈る、そういう一首なのではないか。

ただ、この一首が詠まれた時点の二人の状況については詳しく知らないのに、あるいは誤解かも知れない。

しかし、これもまた、王朝の恋歌にも劣らない名歌であることは疑いない。

牧水の歌に、いよいよ苦しみの色が表われて来るのは、この青春の恋が終わり、結婚して家庭という枠組みの中に、収まりきれない身を収めてからであろう。



旅姿の牧水（昭和3年5月）

それは必ずしも妻子のためではない。今日、妻喜志子の存在と作品に光が当てられ始めていくように、家庭の桎梏は男の側だけに在るのではない。むしろ、妻という立場で抑圧されたもののほうがはるかに大きいであろうことは想像できる。

だが、牧水は、また、常人とは異なる非日常の世界を必要とする人間だつた。

すなわち旅であり、酒である。またもわれ旅人となり、けふ此処のみさきをぞ過ぐ、可愛しきは浪 『死か芸術か』
死は見ゆれど手には取られず、をちかたに浪のごとくに輝きてあり

山に入り雪のなかなる朴の樹に落葉松になにものを言ふべき

真裸体に青浪の中にもまれ来て死にしが如し酒を飲みてむ
かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ

これらの歌は今までに引いた歌ほどは知られていない。ただ、五首目の酒の歌は、よく知られている。やはり酒を愛するうたびと佐佐木幸綱が高く評価する一首であることが興味深い。愛酒家にもみ通じる心であろうか。

『死か芸術か』の刊行は大正元年。牧水二十八歳。喜志子と結婚した年である。

年齢的にはじゅうぶん若いだが、既に、『海の声』の青春の輝きは消えている。大上段に構え

た歌集の題名も、その苦悩を示していよう。一首一首読めば、すぐれた歌ではある。しかし、若くして一線を越えてしまった天才の悲しさは、並の秀歌では人に感動を与えにくいのだ。この前年も翌年も牧水は歌集を刊行し、まさに矢継早といった感じで、創作のエネルギーがあふれているようだが、満たされないものを最もよく知っていたのは作者自身だろう。「白鳥は哀しからずや」や「幾山河」にあったような、ある意味で自意識からも遠い、純粹な魂の飛翔は、もはや訪れない。



第14歌集『山桜の歌』

牧水の若すぎる晩年の代表作といわれる山桜の歌を取り上げてこの小文の結びとしたい。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花 『山桜の歌』

これもまた牧水の歌としては愛誦されていく一首だろう。この歌集の刊行は大正十二年、三十九歳である。

まさに成熟した大人の歌である。言葉にひとつのむだもなく、美しく山桜を讃えている。しかし、かつての牧水が持っていた自在な想像力の翼はすっかりたたまれていた。それまでの、青春の名残りの情熱と社会との間で葛藤したであろう苦悩の跡もきれいに消えている。いのちに満ちあふれた一首と見えるが、実はこれは死に限りなく近づいた一首なのではないかと思うのである。天与のうたびと牧水の死は、この歌集刊行から五年後である。



〈筆者プロフィール〉みずはら しおん

一九五九年横浜市生れ。早稲田大学大学院仏文学専攻修士課程修了。一九八六年「短歌」に入会。一九九〇年歌集『びあんか』で第三四回現代歌人協会賞を受賞。一九九九年歌集『客人(まらうど)』で第一回駿河梅花文学賞、二〇〇〇年歌集『くわんおん(観音)』で第一〇回河野愛子賞、二〇〇五年歌集『あかるたへ』で第一〇回若山牧水賞、第五回山本健吉文学賞をそれぞれ受賞。ほかに歌集『うたうら』『いろせ』『世阿弥の墓』、『エッセイ集』『星の肉体』『空を忘れぬ』『うたものがたり』『京都うたものがたり』。横浜市在住。今春、本会の第一九回「離の歌会」の講師を務める。

※新刊紹介※



本年は、若山牧水没後八十年目、沼津市若山牧水記念館の開館二十周年です。本会は、これを記念して「牧水と酒」

をテーマとする「日本ほろよい学会」沼津大会を開催するに当たり、牧水の酒にまつわる短歌三六七首と随筆四編を掲載した『牧水酒のうた』を刊行しました。解説は、「日本ほろよい学会」会長の歌人佐佐木幸綱早稲田大学教授にお願いいたしました。

牧水の歌集、随筆、紀行文等の単行本リスト、略年譜を載せ、短歌の初句索引も付けました。お酒好きの人ほもちろん、そうでない人にも十分楽しんでいただけるものと思います。

定価五〇〇円。当館売店で取り扱い中。